

中国文学歳時記

編集委員

黒川洋一
入谷仙介
山本和義
横山弘
深澤一幸

秋
〔下〕



編集委員

黒川洋一・入谷仙介・山本和義・横山弘・深澤一幸



中国文学歳時記

秋〔下〕

同朋舎

●編集委員

黒川洋一
入谷仙介
山本和義
横山弘
深澤一幸



中国文学歳時記 全七卷
●秋〔下〕

一九八九年四月一〇日 初版印刷
一九八九年四月二〇日 初版発行

発行者 今田達
発行所 株式会社同朋舎出版

●本社
〒六〇〇 京都市下京区中堂寺麓田町二
電話(〇七五)三四三—〇六二一
振替・京都五—二二九八二
●東京支店
〒一〇一 東京都千代田区神田駿河台二二—一
電話(〇三三)九二—二〇二一

印刷所 大日本印刷株式会社
製本所 大日本製本紙工株式会社

●
目
次
●

● 生活

..... 1

秋興——秋の思い——秋の夜の思い——

秋の詩情——秋の楽しみ——秋の愁い——

秋の恨み——秋怨——秋の懷旧——

晚秋の朝立ち——秋の旅愁——秋の望郷——

鬼火——秋の別れ——秋の村居——

とろろじる——砵——秋の団扇——月に寄せて——

秋空に箜篌ひびく——秋の琴——

秋の胡笳——秋の鼓角——收穫——豐作——

年貢——脱穀——酒香る——葡萄酒熟す——

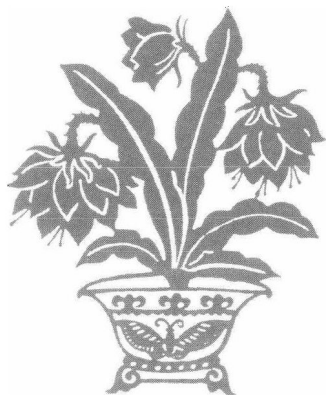
蓮の実とり——橡の実拾い——蟹を食う——

秋の旅——秋の舟旅——紅葉を焼く——

こおろぎ合わせ——辟蝗の符——

● 行事

..... 127



動物

.....165

二星一七夕一曝書一秋の試験一看潮一
重陽一両重陽一菊酒一秋祭り一

螢一蟬一こおろぎ一くもの巣一秋の白しらふふ一
鶴一白たか一秋雁一鱸魚一秋の猿一

植物

.....207

転蓬一茱萸一そばの花一
蓮の花びら一蓮の実一秋の槐一
みかん一楓の実一松かさ一玉簪花一
ねなしかずら一瓜一蒹葭一ざくろの実一
秋の柳一なつめ一紅葉(黄葉)一
菊の花一十日の菊一芭蕉一やまなし一
蘆の花一紅豆一落ち葉一揺落一



秋 [上巻]・目次

●時 候

七月 八月 立秋 白露 秋のきざし 清夜 涼夜 倦夜 秋の夕
べ 秋の夜 秋風の夜 夜長 夜寒 南国の秋 秋深む

●天 文

秋風 秋の声 野分 秋の夜空 秋月 清風明月 月夜 中秋の月
中秋の月蝕 閏山月 西域の月 旅人の月 三日月 天の川 北斗
星 秋雨 秋の夜雨 秋雨晴る 秋のいなずま 秋の霜 風露 露
の珠

●地 理

秋景色 秋の景物 秋の野 秋の谷川 秋の山路 秋の寺 秋の廃
屋 秋の山荘 秋の庭 秋の農家 秋の夜道 秋の村里 稲田 秋
の江村 秋の漁村 秋の水郷 秋の大川 秋の渡し場 秋の池 秋
の沼 洪水 秋の瀑泉 秋の泉 秋の墓地 秋の西湖 秋の秦淮河
秋の洞庭湖 秋の赤壁 秋の戦場 秋の辺境



秋興しゅうきよう

秋興とは、秋の思い、秋の風物に対して起こる感興をいう。『漢書』礼楽志に「秋氣肅殺しよくさつす」とある。「肅殺」とは露霜が草木をいため枯らすことをいう。『白虎通義』五行篇には「秋の言たる、愁しゅうなり」とあり、「悲秋」ともいう。三世紀、魏の劉楨りゅうていの「五官中郎将（後の文帝曹丕）に贈る」詩に「秋日悲懷多し、感慨して以て長嘆す」とあるのが、秋に対する古来の通念である。わが国でも、『古今和歌集』秋の部に「ちぐに物こそ悲しけれ、我身ひとつの秋にはあらねど」と詠まれているように、秋は物悲しい季節とさされている。晋の潘岳はんぐくは「秋興の賦ふ」を作った。その序によれば、晋の武帝十四（二七八）年の秋、彼は三十二歳で、太尉掾たいいけん（軍部長官の属官）で、虎賁中郎将を兼ねて、宮中の散騎省に宿直していた。「高閣は雲に連なり、陽光も照ることまれ」な、ここは貴人たちの遊ぶ所である。彼はもと野人で、草深い田舎に住み、話し相手も農夫たちに過ぎなかったが、いまは宮仕えに休息のいとまもなく、むしろ、池の魚、籠の鳥が江湖山藪さんそくを恋うる思いがある。そこで、慨然としてこの賦を作った。時に秋なので、秋興を篇名としたという。彼はその賦の中で、「善いかな。宋玉の言にいわく、悲しいかな、秋の気たるや。蕭瑟しょうしつたり、草木揺落して衰衰す。慄慄りりりつたり、遠き行にありて、山に登り水に臨みて、將に帰らんとするを送るが

ごとし」と。紀元前三世紀ごろの楚の宋玉の『楚辭』の「九弁」の冒頭の一節をそのまま引用している。蕭瑟とさびしく鳴る風に木の葉が散り衰え、万象が移ろい去るとき、慄慄と胸ふさがって心は痛む。潘岳はこれを承けて、「夫れ帰るを送つては、徒を慕うの恋を懷き、遠き行には羈旅の憤みあり、川に臨み流れに感じて以て逝くを歎き、山に登り遠きを懷いて近きを悼む。かの四つの感いの心を疚ましむるや、一塗に遭いて忍び難し。嗟、秋の日の哀しむべき、諒に愁いとして尽くさざるなし」という。宋玉は逝く秋に、この四つの悲哀に似たものが一つに集まってきて、忍び難かつたのであろうというのである。賦はこのあと、秋の風物を詠じ、宮仕えでの「池魚籠鳥」羈旅の身をなげき、「泉は石間に湍を涌かし、菊は芳崖瀝に揚ぐ」る故郷に帰りたいと結んでいる。このようにして、宋玉の流れをくむ「悲秋文学」が中国詩文の一つの伝統となつて、数々のすぐれた作品を生むようになった。六世紀の隋の薛道衡の「秋日、昆明池に遊ぶ」の詩に「羈心と秋興と、陶然として一杯に寄す」と、秋興が羈旅の遊子の望郷の愁いをともなつて詠まれたのも、この詩想の流れに属する。もともと、唐の李白の「秋日、魯郡の堯祠亭上にて宴し、杜補闕と范侍御に別る」の詩に「我は覚ゆ 秋興の逸れたるを、誰か云う 秋興は悲しと、山は落日とともに去り、水は晴空と宜し」という。李白は春の詩人ともいわれるように、楽天的で豪放な性格であつたから、「秋興は悲しくない」といつたのであろうが、これもやはり当時「悲秋」の觀念が支配的であつたことを裏付けるものと考えられる。李白の連作十七首の「秋浦の歌」第一章にも「秋浦は長に秋に似たり、蕭条として人を愁えしむ、客愁度う可からず、行きて東大樓に上る」という。蕭条とさびしい秋の思い

は、旅人の望郷の悲しみと結びつくのである。その第十五章には有名な「白髮三千丈、愁いに縁りて箇くの似く長し」の句がある。頭上の秋の霜に、移ろいやすい人生の秋を悲しむ。人の世の永遠の憂いこそ、秋の愁いのもっとも痛切なものである。秋景色に触発される情感、「秋興」にはこのようなさまざまな思いが含まれているのである。

数多い秋の詩の中で最も傑出した作品は、秋の詩人といわれる杜甫の「秋興八首」であろう。宋玉、潘岳以来の「悲秋文学」のジャンルは、この七言律詩八首の連作によって、その地歩を確立したといえる。八篇は各自独立しながらも、内容は互いに関連して一篇の賦に似ている。大暦元（七六六）年、五十五歳の杜甫は飄泊の身を四川省の夔州の西閣に寄せていた。東郊にある白帝城下に遊んで、露霜にいたんだ楓樹、風浪渦巻く峽谷のきびしい秋気の中で、この詩を作った。その風物に対する感興は、すべて故郷長安の思い出に連なり、過ぎし日の栄光を回顧しては、いまの衰老零落の身を嘆いているのである。その描写は鮮烈華麗、思想は幽暗悲痛、読む人に深い感動を与えてやまない。次にそのうちの数首をあげて鑑賞に供する。

秋興八首（秋興八首）

唐杜甫

其の一

玉露凋傷楓樹林

玉露凋傷す

楓樹の林

巫山巫峽氣蕭森

巫山巫峽 氣蕭森たり

江間波浪兼天湧

江間の波浪は天を兼せて湧き

塞上風雲接地陰

塞上の風雲は地に接して陰る

叢菊兩開他日淚

叢菊兩たび開いて他日の涙

孤舟一繫故園心

孤舟一たび繫いで故園の心

寒衣處處催刀尺

寒衣処処に刀尺を催し

白帝城高急暮砧

白帝城高くして暮砧急なり

白露は江岸に茂る楓の林を枯らしいためて秋も深く、巫山のもと巫峽に続く、この峽谷の空気は物さびしく身にしみて冷ややかである。長江の大浪は天を巻き込んで湧き立ち、城塞の上から垂れこめる風雲は地に接して暗い。むらがる菊の花はまた咲いたが、眺める眼には、昔と同じ旅愁の涙が溢れ、飄泊のはてに孤独な舟を一たびこの岸に繫いだその時から、すでに故里を恋うる心が高まるのを覚えた。冬着の仕度に、至るところで裁縫をする手をせかせるように、白帝城が高く聳える夕空に、衣打つきぬたの音が急調子に聞こえている。

この詩の表現は極めて象徴的で、難解なところがあつて、その訓読に苦しみ、古来各様の説がある。「叢菊 兩たび開く 他日の涙、孤舟 一に繫ぐ 故園の心」という訓み方が一般に行われて、「一に繫

「ぐ」は「ひたすらに繋ぐ」の意味に解されている。それでは「両たび開く」とは対句として整わない。また「孤舟を繋ぐ」を「心を繋ぐ」にかけたと解する場合、「叢菊が開く」を「涙を開く」に掛けたと解するのであるが、「涙が開く」という用例はない。それゆえ筆者は前掲のように訓読したのである。「孤舟」とは飄泊して心もとない孤独な舟のことで、これを繋ぐとは旅路のはてに舟を寄せ繋ぐ意である。これを旅に出るために舟を繕装するという解釈は取らない。杜甫の「九日」の詩に「舟を繋いで身万里」の「繋ぐ」と同じ用語であろう。また、「舟を繋ぐ」とは「身を舟中に繋ぐ」の意とする解もあるがこれも「一に繋ぐ」と訓むための無理な解釈である。この詩の「他日涙」「故園心」はただ名詞を置いただけで述語のない、特異な表現と見るべきであろう。これは俳句の名詞止めに似ている。「寒衣処処刀尺を催し」もこれと似た用例であるが、それなりに文意の脈絡があり、はさみやものさしで裁縫をする手をせき立てるのは、次の句の「夕べ打つきぬたの急調子」である。暮れゆく城壁の下、望郷の愁いをさそうのは、夜寒の空に聞こえる砧の音である。まことに凄惨の極みである。七言律詩。韻字は林・森・陰・心・砧。

其の二

夔府孤城落日斜
夔府の孤城に落日斜めなり
每依北斗望京華
つねに北斗に依りて京華を望む

聽猿實下三聲淚

猿を聴いて実に下す 三聲の涙

奉使虛隨八月槎

使いを奉じて虚しく随う 八月の槎

畫省香爐違伏枕

画省の香炉 違りて枕に伏す

山樓粉堞隱悲笳

山樓の粉堞 悲笳隱たり

請看石上藤蘿月

請う看よ 石上の藤蘿の月

已映洲前蘆荻花

すでに映らす 洲前の蘆荻の花

夔州府の孤立した城壁に、落日が斜めに射している。日が暮れて北斗星が輝くのをたよりに、私はいつもあの下あたりと首都長安を望み見るのである。ここは巫山峽で、兩岸に猿が多い。古来漁人の歌に「巴東 三峽長し、猿鳴三声 涙裳を沾す」とあるが、その哀鳴を聴くと、実にその通りである。私は劍南節度使の幕僚として命を奉じていた。むかし八月になると槎を仕立てて長江から海に出て、ついに天の河まで行った人があったというが、私もその槎に随いて、天子の都に帰りたいと願ったのもむなしく、いまは長江に飄泊中である。かつては壁画があり香炉を焚きしめた尚書省に仕えた身が、いまは遠い旅路の夜、枕にうつ伏して、寝返りしながら、思いにふけて眠れないでいると、城樓の白壁のひめ垣あたりで吹く悲しげな笳の音がおぼろげに聞こえる。見られよ、さきほど庭石の上に射して藤かずらにかかっていた月は、もう長江の中洲にある蘆の花を照らしている。それにしても眠れぬ秋の夜が長い。

「京華を望む」とは、杜甫にとつては故郷を恋うるとともに、朝廷を思うことであつた。「猿を聴く」は旅人の悲しみをいい、「八月の槎」は天朝のもとに帰りたいと願うのである。

「画省の香炉」は宮仕えの日々を懐い、「枕に伏す」は『詩経』陳風の「沢陂」の「輾転伏枕」の意で、物思ひのため寝返りを繰り返す意味に解した。これを病に臥すと解するのは賛成しがたい。なおこの「画省」の一句は、潘岳の「秋興の賦」に「宵に耿介として寐ねられず、独り華省に展転す」とあるのを反映している。「華省」は散騎省を、「画省」は尚書省をさし、潘岳は宮仕えのために展転し、杜甫はかつての宮仕えを回顧して、南方の旅に伏枕して不眠の夜をすごしているのである。「石上の藤蘿の月」を、「石上の藤かずらを照らす月」と解する人もあるが、「蘿月」「藤蘿月」は、藤かずらの木の間から照る幽暗な月光を意味する。気がつけば、時刻が移つて、月はすでに江岸の蘆荻の白い花を明るく照らしていたのである。

藤蘿は夏のものであり、蘆荻は秋のものであるとして、「夏に藤蘿を照らした月が、今は蘆荻の花に映っている」と解し、季節の推移を嘆いたものであるという解釈が行われているが妥当でない。李白の「秋夜独坐して故山を懷う」の詩に「秋山緑蘿の月、今夕誰が為にか明らかなる」とあり、南朝宋の鮑照の「月下登樓聯句」の「髣髴たり 蘿月の光、繽紛たり 篁霧の陰」の句に「露入りて牖の高きを覚え、蛩蛩んで苑の深きを測る」と付けている。これは「藤蘿の月」が秋の季に用いられる例証である。蘿月は髣髴髣、ぼんやりとした光である。七言律詩。韻字は斜・華・槎・笱・花。

其の三

千	家	山	郭	靜	朝	暉	千	家	の	山	郭	朝	暉	靜	か	な	り
日	日	江	樓	坐	翠	微	日	日	江	樓	翠	微	に	坐	す		
信	宿	漁	人	還	泛	泛	信	宿	の	漁	人	還	た	泛	泛		
清	秋	燕	子	故	飛	飛	清	秋	の	燕	子	故	に	飛	飛	た	り
匡	衡	抗	疏	功	名	薄	匡	衡	疏	を	抗	り	て	功	名	薄	く
劉	向	傳	經	心	事	違	劉	向	經	を	伝	え	て	心	事	違	う
同	學	少	年	多	不	賤	同	學	の	少	年	多	く	は	賤	し	か
五	陵	衣	馬	自	輕	肥	五	陵	の	衣	馬	は	自	ら	輕	肥	な

千戸ほどの小さい山城の町に朝日の光が静かである。私は一日中その江岸のたかどのにいて、山の八合目のあたりの高さに坐っているわけである。二晩泊りの漁夫たちが、また舟を浮かべている。涼しい秋風につばめが南に返るはずなのに、盛んに飛んでいるのが、わざとらしく、都に帰れない私にあてつけているようである。漢の匡衡は天子に上奏文を奉って時務を論じ、光祿大夫に出世したが、私は房琯を弁護して肅宗の怒りを買ひ、手柄も名誉も薄く、役人としては失敗であった。また後漢の劉向は經典を子に伝え